

## 臨床実地問題 50 問(解答時間 2 時間)

1 眼球の組織像を別図 1 に示す.

誤っているのはどれか.

- a ①のターンオーバーは約 1 週間である.
- b ②は細胞の基底膜である.
- c ③は約 200 層の薄葉からなる.
- d ④の主成分は IV 型, VII 型コラーゲンである.
- e ⑤は神経堤細胞由来である.

2 52 歳の男性. 2 か月前から両眼の霧視と眼瞼腫脹を自覚して来院した. 矯正視力は右 0.8, 左 0.7. 眼圧は両眼ともに 38 mmHg. 両涙腺部に腫瘍を触れる. 隅角鏡写真と涙腺生検の病理組織像を別図 2A, 2B に示す.

診断はどれか.

- a 涙腺多形腺腫
- b 涙腺腺様囊胞癌
- c MALT リンパ腫
- d IgG4 関連眼疾患
- e サルコイドーシス

3 眼球の組織像を別図 3A に示す.

この細胞は別図 3B のどこに存在するか.

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

4 生後 3 か月の乳児. 在胎 35 週 3 日, 出生時体重 2,600 g. 右眼の視線が合わず, 顔写真で右眼瞳孔が白く写ったため来院した. 全身と家族歴に特記すべきことはない. 前眼部写真と超音波 B モード断層像を別図 4 に示す.

診断はどれか.

- a Coats 病
- b 発達白内障
- c 網膜芽細胞腫
- d 第 1 次硝子体過形成遺残
- e 家族性滲出性硝子体網膜症

5 55 歳の男性. 数年前から進行する両眼の視力低下で来院した. 矯正視力は右 0.5, 左 0.3. 両眼の眼底写真と OCT 像および多局所 ERG の結果を別図 5A, 5B, 5C に示す.

この患者にみられるのはどれか. 2 つ選べ.

- a 夜盲
- b 中心暗点
- c 求心性視野狭窄
- d 全視野刺激 ERG 正常
- e フルオレセイン蛍光眼底造影検査で黄斑部低蛍光

6 28 歳の女性. 数日前からの右眼の視力低下で来院した. 矯正視力は右 0.2, 左 1.0. 右眼眼底に異常を認める. 左眼に異常はない. 右眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真および OCT 像を別図 6A, 6B, 6C に示す.

診断はどれか.

- a 後部強膜炎
- b Vogt-小柳-原田病
- c 多発消失性白点症候群
- d 多発性後極部網膜色素上皮症
- e 急性後部多発性斑状色素上皮症

7 40 歳の女性. 10 年前から結膜の腫瘍に気付いていたが放置していた. 最近, 肿瘍が徐々に増大したため来院した. 両眼の前眼部写真と結膜腫瘍の生検による病理組織像を別図 7A, 7B に示す.

診断はどれか.

- a 眼窩蜂巣炎
- b 結膜血管腫
- c 多発性骨髄腫
- d MALT リンパ腫
- e 結膜アミロイドーシス

8 62 歳の男性. 網膜剥離で網膜復位術を受けて 5 日間入院した. 職業は会社員で年収 600 万円. 診療点数早見表を別図 8 に示す.

高額療養費制度を用いた時の自己負担額はいくらか.

- a 約 10,000 円
- b 約 40,000 円
- c 約 80,000 円
- d 約 150,000 円
- e 約 500,000 円

9 ロービジョン者が近見時に使用しないのは別図9のどれか。

- a ① a b ⑤ c ③ d ④ e ⑥

10 71歳の男性。3か月前から左上眼瞼腫脹、複視、眼窩深部痛を自覚したため来院した。

眼窩造影MRI像を別図10A, 10Bに示す。

正しい所見はどれか。2つ選べ。

- |                    |                   |
|--------------------|-------------------|
| a 骨への浸潤がある。        | b 視神経を圧迫している。     |
| c 涙腺の腫瘍性病変が疑われる。   | d 腫瘍の内部信号は不均一である。 |
| e 腫瘍と眼球との境界は明瞭である。 |                   |

11 52歳の男性。半年前から右眼のピントが合わなくなり、2か月ほど前から変視を自覚して来院した。視力は右0.7(1.2×+2.00D), 左0.3(1.2×-2.25D)。左眼に異常はない。右眼眼底写真と水平断OCT像を別図11A, 11Bに示す。

次に行うのはどれか。

- a 聴覚検査 b 骨液検査 c 血液検査 d MRI検査 e フルオレセイン蛍光眼底造影検査

12 62歳の男性。複視を主訴に来院した。5年前から甲状腺機能亢進症で加療中である。矯正視力は両眼ともに1.0。眼圧は右12mmHg, 左21mmHg。両眼に上眼瞼後退症を認める。眼球突出度は右14mm, 左18mm。MRI冠状断像を別図12に示す。

予測される眼位はどれか。

- a 左外上斜視 b 左内上斜視 c 左外下斜視 d 左内下斜視 e 眼位異常なし

13 5歳の女児。眼周囲部腫瘍を主訴に来院した。視力は両眼ともに1.2(矯正不能)。外眼部写真と病理組織像を別図13A, 13Bに示す。

診断はどれか。

- a 翳粒腫 b 類皮囊腫 c 横紋筋肉腫 d 涙腺多形腺腫 e サルコイドーシス

14 62歳の女性。右眼の結膜充血と角膜の白色物に気付き来院した。前眼部写真と試験切除の病理組織像を別図14A, 14Bに示す。

診断はどれか。

- a 結膜囊腫 b 結膜乳頭腫 c 結膜リンパ腫 d 結膜悪性黒色腫 e 結膜扁平上皮癌

15 35歳の男性。角膜移植を目的として紹介された。左眼前眼部写真と細隙灯顕微鏡写真を別図15A, 15Bに示す。

正しいのはどれか。2つ選べ。

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| a 常染色体劣性遺伝である。    | b 移植を行っても再発する。   |
| c 酸性ムコ多糖の沈着がある。   | d 角膜内皮細胞の減少を認める。 |
| e 再発性角膜びらんを生じやすい。 |                  |

16 38歳の男性。昨日起床時から右眼の強い眼痛を自覚して来院した。1か月前に木の枝で右眼を突いたが数日で痛みは引いたため放置していた。初診時の前眼部写真とフルオレセイン染色写真を別図16に示す。

適切な治療はどれか。3つ選べ。

- |            |             |               |
|------------|-------------|---------------|
| a 圧迫眼帯     | b 角膜表層穿刺    | c アシクロビル眼軟膏点入 |
| d 抗真菌薬局所投与 | e 治療的角膜表層切除 |               |

17 25 歳の女性。頻回交換ソフトコンタクトレンズを使用していたが、水道水で洗浄したり、2 週間以上使用していた。3 日前からの左眼の充血と昨日からの眼痛で来院した。疼痛で開瞼困難である。前眼部写真を別図 17 に示す。

適切な治療はどれか。

- a 抗菌薬点眼
- b 人工涙液点眼
- c アシクロビル眼軟膏点入
- d 副腎皮質ステロイド点眼
- e クロルヘキシジングルコン酸塩点眼

18 60 歳の男性。左右の瞳孔の形が違うことに気付き来院した。矯正視力は両眼ともに 1.2。眼圧は右 14 mmHg, 左 17 mmHg。両眼の前眼部写真と角膜内皮スペキュラマイクロスコープ写真を別図 18A, 18B に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 男性に多い。
- b 心奇形を伴う。
- c 両眼性が多い。
- d 虹彩異常は進行性である。
- e 頸動脈エコーが診断に有用である。

19 眼表面のフルオレセイン染色時に得られた点状表層角膜症の染色パターンを別図 19 に示す。

正しい組合せはどれか。2 つ選べ。

- a ①——重症涙液減少型ドライアイ
- b ②——春季カタル
- c ③——Meibom 腺機能不全
- d ④——薬剤性角膜上皮障害
- e ⑤——神経麻痺性角膜症

20 53 歳の男性。右眼の変視を訴えて来院した。視力は右 0.3(0.4 × +0.50 D ⊖ cyl -0.75 D Ax 180°)。高血圧、糖尿病の既往はない。右眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真的早期像および OCT 像を別図 20A, 20B に示す。左眼眼底に異常はない。

診断はどれか。

- a 典型加齢黄斑変性
- b 網膜血管腫状増殖
- c 網膜静脈分枝閉塞症
- d 黄斑部毛細血管拡張症
- e ポリープ状脈絡膜血管症

21 65 歳の男性。約 1 か月前からの右眼視力低下と中心暗点を主訴に来院した。矯正視力は右 0.8。眼底写真、OCT 像、フルオレセイン蛍光眼底造影写真、インドシアニングリーン蛍光眼底造影写真を別図 21 に示す。高血圧の既往がある。

診断はどれか。

- a 網膜細動脈瘤
- b 網膜色素線条
- c 典型加齢黄斑変性
- d 網膜血管腫状増殖
- e ポリープ状脈絡膜血管症

22 29 歳の女性。右眼の突然の視野欠損と光視症を訴えて来院した。右眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真および OCT 像を別図 22A, 22B, 22C に示す。

診断に有用な検査はどれか。2 つ選べ。

- a 視野検査
- b 多局所 ERG
- c VEP
- d 頭部 CT
- e 頭部造影 MRI

23 42 歳の女性。最近左眼の歪視を自覚して来院した。左眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真および OCT 像を別図 23A, 23B に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 脈絡膜骨腫
- b 脈絡膜母斑
- c 脈絡膜血管腫
- d 脈絡膜黒色腫
- e 脈絡膜転移性腫瘍

24 3歳の男児。3歳児健診で視力不良を疑われて来院した。視力は両眼ともに(0.4×+4.00D)。右眼 OCT 像を別図24に示す。左眼も同様の所見である。

正しいのはどれか。

- a 低眼圧
- b 求心性視野狭窄
- c ERG で a 波減弱
- d ERG で b 波減弱
- e 周辺部網膜の無血管帯

25 1歳6ヶ月の男児。小児科医に内斜視を指摘されて来院した。右眼に異常はない。左眼には別図25のような所見がみられる。眼窩 X 線 CT 検査では両眼の眼内に石灰化病変はみられない。

最も考えられるのはどれか。

- a Coats 病
- b 脈絡膜骨腫
- c 脈絡膜血管腫
- d 脈絡膜コロボーマ
- e 脈絡膜悪性黒色腫

26 56歳の男性。2週前から右眼の霧視を自覚したため来院した。矯正視力は両眼ともに1.2。眼圧は右30mmHg、左15mmHg。右眼虹彩毛様体炎と硝子体混濁を認める。右眼眼底写真を別図26に示す。

正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 両眼性が多い。
- b 自然治癒することがある。
- c 病原体の終宿主はネコである。
- d 経胎盤的先天性感染が疑われる。
- e 特異的 IgG 抗体陽性、IgM 抗体陰性である。

27 33歳の女性。8日前から右眼球運動時痛を感じている。3日前から右眼の視力低下も自覚したため来院した。下肢に感覺障害と脱力感がある。視力は右0.1(矯正不能)、左1.2(矯正不能)。右眼に相対的瞳孔求心路障害(RAPD)を認める。眼位・眼球運動は正常。Goldmann 視野検査の結果と眼窩部水平断および冠状断 MRI 画像を別図27A, 27B, 27C に示す。

確定診断に有用な検査はどれか。2つ選べ。

- a ERG
- b OCT
- c 脊髄 MRI
- d 抗アクアポリン4抗体
- e フルオレセイン蛍光眼底造影

28 49歳の男性。5年前から糖尿病で内服治療を受けている。数日前からの複視を自覚して来院した。9方向眼位写真を別図28に示す。頭部 MRI および MRA では異常はみられない。

正しいのはどれか。

- a 複視は交叉性である。
- b 左眼瞳孔が散大している。
- c 異常神経連合がみられる。
- d ボツリヌス毒素を上直筋に投与する。
- e 副腎皮質ステロイド全身投与が有効である。

29 3歳の女児。眼性斜頸に対する治療を目的に来院した。眼窩 MRI 画像を別図29に示す。

左眼の手術で適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 上斜筋腱縫い上げ術
- b 上斜筋切腱術
- c 下斜筋後転術
- d 下直筋後転術
- e 原田-伊藤法

30 10歳の男児。視線のずれが気になるため来院した。上方視40Δ、下方視20Δの外斜偏位を認める。9方向眼位写真を別図30に示す。

適切な手術はどれか。

- a 右眼の内直筋後転(上方移動)+外直筋短縮(下方移動)
- b 右眼の外直筋後転(下方移動)+内直筋短縮(上方移動)
- c 左眼の外直筋後転(上方移動)+内直筋短縮(下方移動)
- d 左眼の内直筋後転(下方移動)+外直筋短縮(上方移動)
- e 両眼の外直筋後転(下方移動)

31 4 歳の男児。2か月前から時々眼が寄ると母親が訴えて来院した。アトロピン硫酸塩水和物点眼後の屈折値をもとに眼鏡を作製し、装用開始後 9か月の視力は右(1.2×+4.00 D), 左(1.2×+3.75 D)。遠見と近見で斜視角に差はない、AC/A 比も正常である。裸眼時と眼鏡装用時の眼位写真を別図 31 に示す。

今後の対応で正しいのはどれか。

- a 経過観察    b 右眼遮閉    c 二重焦点眼鏡処方    d ポツリヌス毒素治療    e 斜視手術

32 10 歳の男児。石原色覚検査表で異常を指摘されて来院した。パネル D-15 テストとアノマロスコープの結果を別図 32A, 32B に示す。

判定はどれか。

- a 正常    b 1型3色覚 弱度    c 2型3色覚 弱度    d 3型3色覚 弱度    e 判定不能

33 43 歳の女性。左眼の視力低下を主訴に来院した。視力は右 1.0(矯正不能)、左 0.06(矯正不能)。左眼に相対的瞳孔求心路障害(RAPD)陽性。両眼の眼底写真と眼位写真を別図 33A, 33B に示す。

障害部位はどれか。

- a 網膜    b 視神経    c 眼窩先端部    d 海綿静脈洞    e 中脳

34 8 歳の男児。学校健診で視力低下を指摘され、近医で眼底異常を疑われ紹介されて来院した。視力は右 0.3(1.0×-0.75 D), 左 0.4(1.0×-0.75 D)。眼位は正位。眼球運動に異常はない。側方視時に眼振を認める。両眼の眼底写真と頭部 MRI 画像を別図 34A, 34B に示す。

診断はどれか。

- a 視神経炎    b うつ血乳頭    c 視神経網膜炎    d 乳頭ドリーゼン    e Leber 遺伝性視神経症

35 43 歳の女性。進行する視力低下を主訴に来院した。視力は右 0.02(矯正不能)、左手動弁(矯正不能)。眼位写真と 9 方向眼位写真および両眼の眼底写真を別図 35A, 35B, 35C に示す。

正しいのはどれか。

- |                              |                |
|------------------------------|----------------|
| a 胸腺腫大                       | b 拡張型心筋症       |
| c 抗 GQ1b 抗体陽性                | d ミトコンドリア遺伝子欠失 |
| e エドロホニウム塩化物静注試験(テンシロンテスト)陽性 |                |

36 50 歳の男性。片眼に眼圧上昇を繰り返すため紹介されて来院した。細隙灯顕微鏡写真を別図 36 に示す。

前房水検査で検出されるのはどれか。

- a サイトメガロウイルス    b 単純ヘルペスウイルス    c 水痘帯状疱疹ウイルス  
d アカントアメーバ    e カンジダ

37 25 歳の男性。右眼に野球ボールが当たり、視野障害を來したため来院した。矯正視力は両眼ともに 1.0。眼圧は両眼ともに 12 mmHg。右眼角膜、結膜に損傷はない。右眼眼底写真を別図 37 に示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察    b 抗菌薬硝子体内注射    c 前房洗浄    d 強膜内陥術    e 硝子体手術

38 10 歳の男児。工作の間に彫刻刀で左眼を突いた。強角膜裂傷と水晶体損傷および網膜剥離を生じたため、緊急手術を行い、シリコーンオイルタンポナーデを施行した。左眼前眼部写真と広角眼底写真および OCT 像を別図 38A, 38B, 38C に示す。

黄斑部の所見で正しいのはどれか。

- a 網膜浮腫    b 網膜皺襞    c 網膜下異物    d 網膜下出血    e 漿液性網膜剥離

**39** 19歳の男性。ボクシングの練習中に左眼を強打した。直後より嘔吐、複視、眼球運動痛がみられたため救急搬送された。症状は現在も続き、ぐったりとしている。脈拍40/分、整。血圧110/70mmHg。呼吸数16/分。対光反射は正常。

予想される眼窩CT画像は別図39のどれか。2つ選べ。

- a ① b ② c ③ d ④ e ⑤

**40** 76歳の女性。自動車事故で胸部を打撲し、胸骨と右肋骨を骨折。受傷後10日頃から右眼の視力低下を自覚して来院した。視力は右0.05(0.3×+2.50D) cyl-1.00D Ax 85°、左0.4(0.9×+3.50D) cyl-2.00D Ax 100°。両眼の眼底写真を別図40に示す。高血圧と糖尿病の既往がある。

診断はどれか。

- a Eales病 b 糖尿病網膜症 c Purtscher網膜症  
d 網膜中心動脈閉塞症 e 網膜中心静脈閉塞症

**41** 50歳の女性。左眼の全層角膜移植を6か月前に受けた。視力は左(0.4×+3.00D) cyl-8.00D Ax 170°。

前眼部写真と角膜形状解析の結果を別図41A、41Bに示す。現在0.1%ベタメタゾンと抗菌薬点眼を1日4回使用している。

乱視に対する対応はどれか。

- a 経過観察 b 乱視矯正角膜切開 c 全ての縫合糸を抜糸  
d 1時と7時の縫合糸を抜糸 e 4時と10時の縫合糸を抜糸

**42** 83歳の女性。右眼に全層角膜移植を受けている。1週前から充血と視力低下を生じたため来院した。視力は右(0.3×+3.00D) cyl-3.00D Ax 90°。眼圧は右10mmHg。前眼部写真とフルオレセイン生体染色写真を別図42A、42Bに示す。

適切な治療法はどれか。

- a 抗菌薬頻回点眼 b 副腎皮質ステロイド頻回点眼  
c アシクロビル眼軟膏点入とバラシクロビル塩酸塩内服 d 治療用コンタクトレンズ装用  
e 全層角膜移植

**43** 36歳の女性。Axenfeld-Rieger異常で全層角膜移植と水晶体再建術および線維柱帯切除術を受けている。水疱性角膜症に対する再移植時の術中写真を別図43に示す。

縫合糸で固定されているリングの目的は何か。

- a 開瞼 b 散瞳 c 眼球固定 d 濾過胞保護 e 眼球形態維持

**44** 65歳の女性。右眼の異物感を自覚して来院した。前眼部写真とフルオレセイン生体染色写真を別図44A、44Bに示す。

適切な治療はどれか。2つ選べ。

- a 結膜焼灼 b 結膜切除 c 涙点プラグ d 眼瞼皮膚切除 e 副腎皮質ステロイド点眼

**45** 44歳の男性。半年前に屈折矯正手術を受けている。視力は左2.0(矯正不能)。眼圧は左16mmHg。左眼前眼部写真と前眼部OCT像を別図45A、45Bに示す。

最も注意すべき合併症はどれか。

- a 白内障 b 隅角閉塞 c 瞳孔偏位 d 角膜拡張症 e 角膜内皮障害

**46** 67歳の女性。数年前に左眼緑内障手術を受けた。昨日から左眼の結膜充血と異物感および眼脂を自覚し来院した。矯正視力は左1.2。眼圧は左8mmHg。左眼前眼部写真を別図46に示す。左眼の前房内に炎症所見はなく、眼底に緑内障性視神経萎縮以外の異常所見はない。

適切な処置はどれか。

- a 無治療で経過観察 b 副腎皮質ステロイド点眼 c 副腎皮質ステロイド内服  
d 抗菌薬頻回点眼 e 抗菌薬硝子体内注射

47 72 歳の男性。術後 2 日目の広角眼底写真を別図 47 に示す。

このような合併症を起こす手術はどれか。3つ選べ。

- a 周辺虹彩切除術    b 線維柱帯切開術    c 線維柱帯切除術    d 輪状締結術    e 硝子体手術

48 4 歳の女児。出生時体重 2,920 g。全身には異常を認めない。左眼フルオレセイン蛍光眼底造影写真を別図 48 に示す。

まず行うべき対応はどれか。

- a 経過観察    b 網膜光凝固    c ジアテルミー凝固  
d 抗 VEGF 薬硝子体内注射    e 硝子体手術

49 67 歳の男性。右眼は網膜剥離に対して硝子体手術を受けた既往がある。OCT 像を別図 49 に示す。

正しいのはどれか。

- a 黄斑浮腫    b 網膜下液残存    c 網膜色素上皮剥離  
d 網膜内ガス迷入    e 網膜下液体パーフルオロカーボン迷入

50 10 歳の男児。右眼に傘の柄が当たったため来院した。視力は右 0.8(矯正不能)。右眼眼底写真と OCT 像を別図 50A, 50B に示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察    b 副腎皮質ステロイド内服    c 硝子体内ガス注入  
d 抗 VEGF 薬硝子体内注射    e 硝子体手術